

# 携帯メールによる受講者の感想文の収集と分析

塚本 榮一

赤堀 侃司

東洋英和女学院大学人間科学部 東京工業大学大学院社会理工学研究科

## 1. 研究の背景

授業で質問はないかと問いかけても学生は発言しないので理解状態を把握することが困難である。そこで携帯メールによる受講者の感想文の収集と分析を試みた。収集は筆者が勤務している大学の学部学生 100 名を対象に行い、分析は 20 名の半期の授業である。授業内容は「記憶と学習」である。毎回授業の最後に感想文を携帯メールで送らせこれを受信し整理するメール管理システムを開発して使用した。

## 2. メール管理システム

メールは出席管理にも利用するので個人毎に整理し、教員がいつでも参照できるようにした。1回の授業で2回以上受信した場合は、出席回数が不要に増加するので教員が確認後削除した。出席していない学生からのメールを防ぐため内容が受講した結果と認められない場合も削除した。これらのルールは履修登録を行う前に学生に説明した。携帯電話を忘れたりバッテリーが切れたりした場合は友人の携帯電話を借りて送信させた。社会人学生の中には携帯メールを使用しない者がいるので、その場合は授業終了後パソコンから送信するように指示した。

受信したメールには正しく受信した旨の返信メールを返した。迷惑メール防止のためにパソコンからのメールを受信拒否に設定している受講者がいたので本授業を履修中は解除するように指示した。以上の結果、出席管理について運用上の問題を生じていない。

## 3. キーワードの抽出と分類

収集したメールの文章を、講義について述べている主題部と受講者の意図が表出されている叙述部に分けた。例えば記憶についての授業であれば記憶に関する事柄が主題部に記述されており、叙述部にはその事柄について受講者が感じた内容が記述されている。この部分には主題に対する興味や驚き、達成感などが記述されているので、叙述部に学習者が

表 1 叙述部のキーワードのカテゴリ別分類

カテゴリ	叙述部のキーワード			類型表現
A)興味	楽しかった 満足した わくわくした	面白かった 役立った*1 感慨深い	興味をもった いいなと思った ビックリした	楽しい、面白い、なぜだろう 興味深い、驚いた 盛り上がった
B)達成	やった したい します	できた していきたい してみよう	聞きたい 努めたい やって下さい	もっとして下さい
C)知識	知った わかった かもしれない	覚えた わかりました ~だったみたい	納得した	知りました、学びました
D)洞察	と気づいた かなと思う かもしれない	だと考えた と感じた ~はなぜだろうと思う	~ですよ 考えさせられた	~だと考えました

理解した過程を示すキーワードが含まれていると考えた。研究対象にしたクラス 100 名中期末試験が最上位だった 10 名と単位は取得したが成績が最下位だった 10 名の学生を対象にキーワードを 3 人の研究者の協議によって抽出し分類した。グラウンデッド・セオリーを提唱したグレーザーは質的分析においては研究者の先見性や恣意性が解釈に混入しないように、いつでも元のデータに戻ってデータの意味を読み取るべきだ<sup>(1)</sup> といっている。本研究では 3 人の研究者の協議により常にデータに密着した分析を行った。先に筆者らは WEB 上に示した語彙を選択させる方法により学習者に A)感情、B)感覚、C)理解、D)推理の 4 つ反応があることを示したが<sup>(2)</sup>、本研究でその意味をさらに詳しく分析した結果 A)興味、B)達成、C)知識、D)洞察の 4 つカテゴリに分類された。その結果を表 1 に示す。

#### 4. 考察

A)興味と C)知識の叙述部は受講者になぜかと問えば「なぜなら～だから」と説明できる内容であり理にかなった合理的反応である。この反応は与えられた授業内容や環境により発生した反応であるから受講者の受容反応と位置づけられる。わかった気持ちになることであり、これまでこの反応を重視して授業を行ってきた。一方 B)達成と D)洞察の叙述部は受講者になぜかと問うても「～だから」とうまく説明できない。とにかくそうだと理を超えて言わざるを得ない非合理的反応である。この反応は受講者に内発する反応であるから構成反応と位置づけられる。ただ聞いてわかるのではなく自ら思考した受講者自身の能動的な反応である。坂元はこの能動的な構成反応を生じさせることが重要だ<sup>(3)</sup> としている。以上を整理すると図 1 のように位置づけられた。

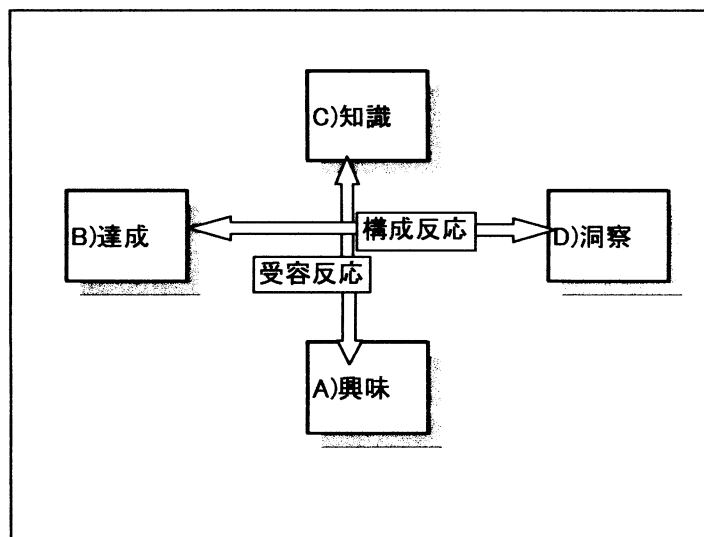


図 1 受容反応と構成反応の位置づけ

今後この構成反応を生じる授業の構築方法の研究を進めたいと考えている。

#### 謝辞

本研究は平成 16 年度日本学術振興会科学研究費基礎研究 C 「学習者レスポンスの分析による思考過程の変容の解明と授業改善」(課題番号 16500610 研究代表者 塚本榮一)の補助を受けて行われた。

#### 参考文献

- (1)木下健仁：“グラウンデッド・セオリー・アプローチ—質的実証研究の再生”、弘文堂、東京(1999)
- (2) 塚本榮一、赤堀侃司：“学習者レスポンスを用いた授業改善電子カルテシステムの開発と評価”、日本教育工学会論文誌、第 27 巻第 1 号：11-21 (2003)
- (3) 坂元昂：“大学教育改善技法”、社会情報 Vol.2 No.2 札幌学院大学社会情報学部：101-109 (1993)